研究方法

「子育てと父親のワーク・ライフ・バランスに関するアンケート調査」は、岡山県2市と埼玉県1市の管轄担当課を通して協力が得られた保育所・幼稚園を利用している父親に対して実施した。調査に際して、プライバシーの保護などについて記載した依頼書を配布し、納得した場合のみ、調査に参加することを依頼した。

統計解析には、「子育てと父親のワーク・ライフ・バランスに関するアンケート調査」の中から、基本属性（年齢、家族構成、学歴、収入、職種）、父親の家事・育児参加、家庭（家族）・地域社会への貢献満足度、ワーク・ライフ・バランスの充実度を抜粋した。

父親の家事・育児参加は、第2回全国家庭動向調査[5]を参考に、家事参加に関して6項目（ゴミ出し、日常の買い物、部屋の掃除、洗濯、炊事、風呂洗い）、育児参加に関して6項目（子どもの遊び相手をする、子どもを風呂に入れる、子どもを寝かしつける、子どもに食事をさせる、子どものおむつを替える（下着等を替える）、子どもをあやす）を使用した。回答と数量化は「0点：やらない」、「1点：月1〜2回はしている」、「2点：週1〜2回はしている」、「3点：週3〜4回はしている」、「4点：毎日・毎回している」とした。

家庭（家族）・地域社会への貢献満足度は、家庭（家族）ならびに地域社会への貢献度に対する満足感についてそれぞれ7項目でたずねた。具体的には、家庭（家族）への貢献満足度は、「あなたは家族とのレジャー（余暇時間）に満足していますか」、「あなたは家族との会話時間に満足していますか」、「あなたは家事への参加に満足していますか」、「あなたは育児（介護）への参加に満足していますか」、「あなたは家族との人間関係の作り方に満足していますか」、「あなたは自分の家族愛の実現のさせ方に満足していますか」、「あなたは家族に対する経済的な支えに満足していますか」の7項目、地域社会への貢献満足度は、「あなたは地域の文化活動への参加に満足していますか」、「あなたは地域の福祉活動への参加に満足していますか」、「あなたは地域の振興（発展）活動への参加に満足していますか」、「あなたは地域の環境問題の解決への参加に満足していますか」、「あなたは地域の安全問題の解決への参加に満足していますか」、「あなたは地域の子ども達に対する教育活動への参加に満足していますか」、「あなたは地域の子育て支援活動への参加に満足していますか」の7項目で測定した。回答と得点化は、「0点：いいえ」、「1点：どちらでもない」、「2点：はい」とした。

ワーク・ライフ・バランス充実度は、「他の人と比べてみて、仕事と家庭生活の調和（バランス）は上手くとれているほうだ」、「自分の理想と比べてみて、仕事と家庭生活の調和（バランス）は上手くとれているほうだ」、「昨年の自分と比較してみて、仕事と家庭生活の調和（バランス）は上手くとれているほうだ」の3項目について、それぞれ「0点：まったくそう思わない」〜「4点：とてもそう思う」の5件法で測定した。

統計解析に際しては、独自に作成した測定尺度の信頼性と妥当性を、それぞれ確認的因

子分析（1 因子モデル）ならびにクロンバックのα信頼性係数により検討した。ただし、ワーク・ライフ・バランス充実度尺度に関しては、項目数が 3 つであり、因子分析が行えないため、信頼性係数のみ検討した。その後、父親の家事・育児参加、家庭（家族）・地域社会への貢献満足度、ワーク・ライフ・バランスの充実度に関する因果関係モデルを構築し、そのモデルのデータへの適合度ならびに変数間の関連性を構造方程式モデリングにより検討した。当該モデルのデータに対する適合度は、Goodness of Fit Index（GFI）、Comparative Fit Index（CFI）、Root Mean Square Error of Approximation（RMSEA）の値により総合的に判断した。なお、一般的には、GFI と CFI は 1 に近いほど（0.9 以上）、RMSEA は 0 に近いほど（0.1 を超えないこと）、モデルのデータに対する当てはまりは適切であると判断される。

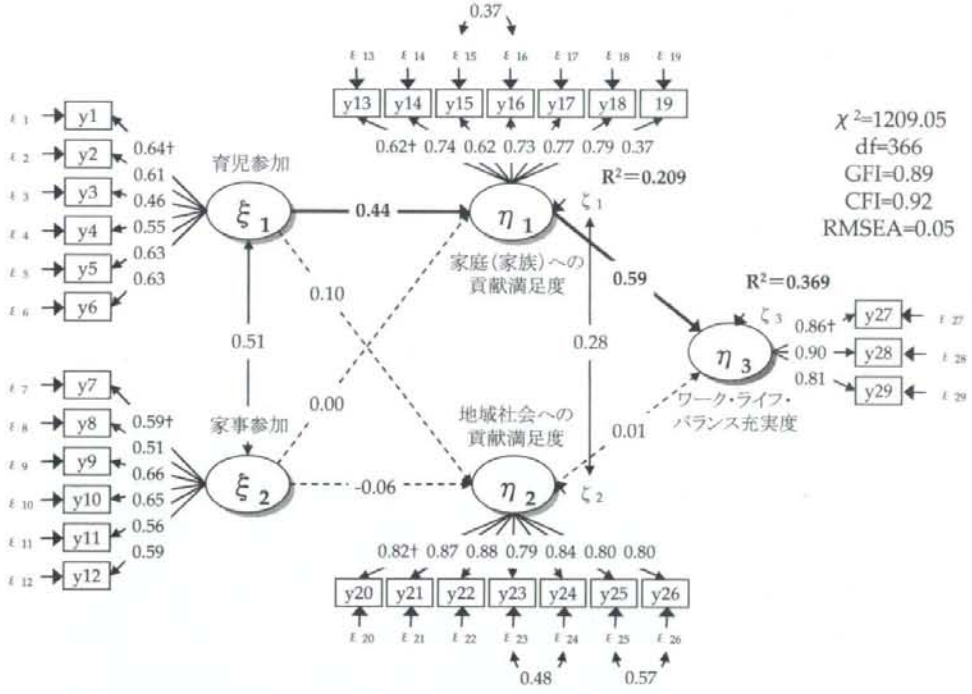
以上の統計解析には、回収された調査票（岡山県 945 名、埼玉県 322 名）のうち、職業が会社員（857 名）で、かつすべての項目に欠損値をもたない 726 名を統計資料とした。

研究結果

集計対象者の属性等の分布は、平均年齢 35.9 歳（標準偏差 5.26）、範囲 22-54 歳であった。世帯構成は、「夫婦と子ども」628 名（86.5%）、「父親と子ども」3 名（0.4%）、「子どもと親とその親（実父母・義父母）」89 名（12.3%）、「その他」6 名（0.8%）であった。最終学歴は、「大学院」29 名（4.0%）、「大学」306 名（42.1%）、「短大・専門学校」95 名（13.1%）、「高校」263 名（36.2%）、「中学」30 名（4.1%）、「その他」3 名（0.4%）であった。

まず、家庭（家族）への貢献満足度尺度について確認的因子分析を行った。その結果、$\chi 2=179.66$（df=14）、GFI=0.93、CFI=0.92、RMSEA＝0.12 と十分な適合度が得られなかったため、修正指数に従い、「あなたは家事への参加に満足していますか」と「あなたは育児（介護）への参加に満足していますか」の誤差項目間に共分散を認めた。その結果、適合度は $\chi 2=77.46$（df=13）、GFI=0.96、CFI=0.96、RMSEA=0.08 に改善され、良好な適合度を示した。同様に、地域社会への貢献満足度尺度について確認的因子分析を行った結果、$\chi 2=461.38$（df=14）、GFI=0.84、CFI=0.90、RMSEA=0.21 と十分な適合度を得られなかった。そのため、修正指数に従い、「あなたは地域の環境問題の解決への参加に満足していますか」と「あなたは地域の安全問題の解決への参加に満足していますか」、「あなたは地域の子ども達に対する教育活動への参加に満足していますか」と「あなたは地域の子育て支援活動への参加に満足していますか」のあいだの誤差項目間に共分散を認めた。その結果、適合度は $\chi 2=86.93$（df=12）、GFI=0.96、CFI=0.98、RMSEA=0.09 に改善され、良好な適合度を示した。なお、家庭（家族）への貢献満足度、地域社会への貢献満足度、ワーク・ライフ・バランスの充実度に関する各指標のクロンバックのα信頼性係数は、それぞれ 0.85、0.94、0.89 と良好であった。

次に、父親の家事・育児参加と家庭・地域社会への貢献満足度およびワーク・ライフ・バランスの充実度との関連性を構造方程式モデリングにより検討した。その結果、適合度は$\chi 2$=1209.05（df=366）、GFI=0.89、CFI=0.92、RMSEA=0.05とおおむね良好な数値を示した（図1）。ただし、統計学的に有意なパスは父親の育児参加から家庭（家族）への貢献満足度に向かうパス（標準化推定値=0.44）と、家庭（家族）への貢献満足度からワーク・ライフ・バランス充実度に向かうパス（標準化推定値=0.59）のみであった。なお、家庭（家族）への貢献満足度、ワーク・ライフ・バランス充実度に対する説明率は、それぞれ20.9%、36.9%であった。



注1）長方形は観測変数、楕円は潜在変数、ηは内生潜在変数、εは観測変数の誤差変数、ζは潜在変数の誤差変数、矢印上の数値は標準化推定値を意味する。また、破線は統計学的に非有意なパスである。
注2）†はモデル識別のために制約を加えた箇所である。

図1．父親の家事・育児参加と家庭（家族）・地域社会への貢献満足度およびワーク・ライフ・バランス充実度との関連性

考察

本研究は、諸企業に勤務している若い父親世代を対象に、彼らの家事・育児参加と家庭（家族）・地域社会への貢献満足度およびワーク・ライフ・バランス充実度との関連性を検討した。

その結果、父親の育児参加は家庭（家族）への貢献満足度に対して正の関連性、家庭（家

族）への貢献満足度はワーク・ライフ・バランス充実度に対して正の関連性を示した。このことは、父親の育児参加は、単に自身の家庭（家族）への貢献満足度を高めるのみならず、それを介してワーク・ライフ・バランスの充実度を高めることを意味している。森下（2006）[6]の幼稚園児の父親を対象とした研究では、父親の育児参加、とりわけ子どもとの遊びや世話といった直接的な育児行動は、「家族への愛情」や「過去と未来への展望」といった父親になることによる発達に有意な関連性を示すことが報告されている。また、佐々木（1996）[7]の展望論文においても、父親の育児参加は、父親自身の人格発達や親としての自覚を高めることが報告されている。他方、柏木（2007）[8]は、父親が育児行動をほとんど行わない場合、家庭内での地位低下を引き起こし、中年期以降の父親自身のアイデンティティにネガティブな影響を及ぼすことを指摘している。このことから総合的に勘案すると、父親にとって育児参加とは、親として、あるいはひとりの人間として成長していく過程のひとつであると同時に、父親自身が家庭や家族の一員として自らの居場所やアイデンティティを確立させていく一助になっているものと推察される。その意味では、育児関与が高い父親ほど、自らの家庭や家族に対する貢献度を強く認識し（あるいは自負し）、またそれが自身のワーク・ライフ・バランスの充実度にポジティブな影響を与えていたことは妥当な結果であったと考えられる。加えて、このことは父親のワーク・ライフ・バランスを実現する上で、単に仕事の側面のみならず、育児をはじめとする家庭・家族との関わりを尊重していくことの重要性を示唆するものである。したがって、父親のワーク・ライフ・バランスの実現を図るためには、父親が積極的に育児に参加し、そこに自らの価値を見出せるような職場環境、社会環境の整備を行うとともに、彼らの家庭や家族との関わりを重視した支援が望まれる。

文献

1) Halpin N. Work Life Balance - an Overview. Work Life Balance Centre. The Counseling Service, The University of Dundee. 2007.
2) 福丸由佳. 共働き夫婦世帯における多重役割と抑うつとの関連. 家族心理学研究, 14 (2) : 151-162, 2000.
3) 福丸由佳. 乳幼児を持つ父母における多重役割と抑うつ度との関連を示すモデルの検討. 御茶ノ水女子大学大学院人間文化研究所論叢, 4:11-21, 2001.
4) 岩崎孝子. 乳幼児をもつ共働き夫婦のQOLとスピルオーバーの関係. 国立看護大学校研究紀要, 6 (1) : 35-42, 2007.
5) 国立社会保障・人口問題研究所. 第2回全国家庭動向調査, 2000.
6) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17 (2) : 182-192, 2006.
7) 佐々木保行. 父親の発達研究と家族システムー生涯発達心理学的アプローチー. 教育

心理学年報, 35: 137-146, 1996.
8) 柏木惠子. 父親であること. 榎本博明 (編) 「現在のエスプリ」別冊 セルフアイデンティティ 拡散する男性像. 至文堂, 137-146, 2007.

本研究は、平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）主任研究者　高橋重郷）により実施されたものです。

家族・労働政策等の少子化対策が結婚・出生行動に及ぼす効果に関する総合的研究
「若い親世代のワーク・ライフ・バランスに及ぼす要因の検討」

2009 年（平成 21 年）3 月発行

分担研究者：中嶋和夫
研究協力者：尹靖水，林浩康，近藤理恵，金潔，桐野匡史，張英恩，朴志先，三輪英里子

〒719-1197　岡山県総社市窪木 111
TEL　0866-94-2064（内線 6601）